

42194

教科書文庫

4
810
42-1923
20000 81507

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

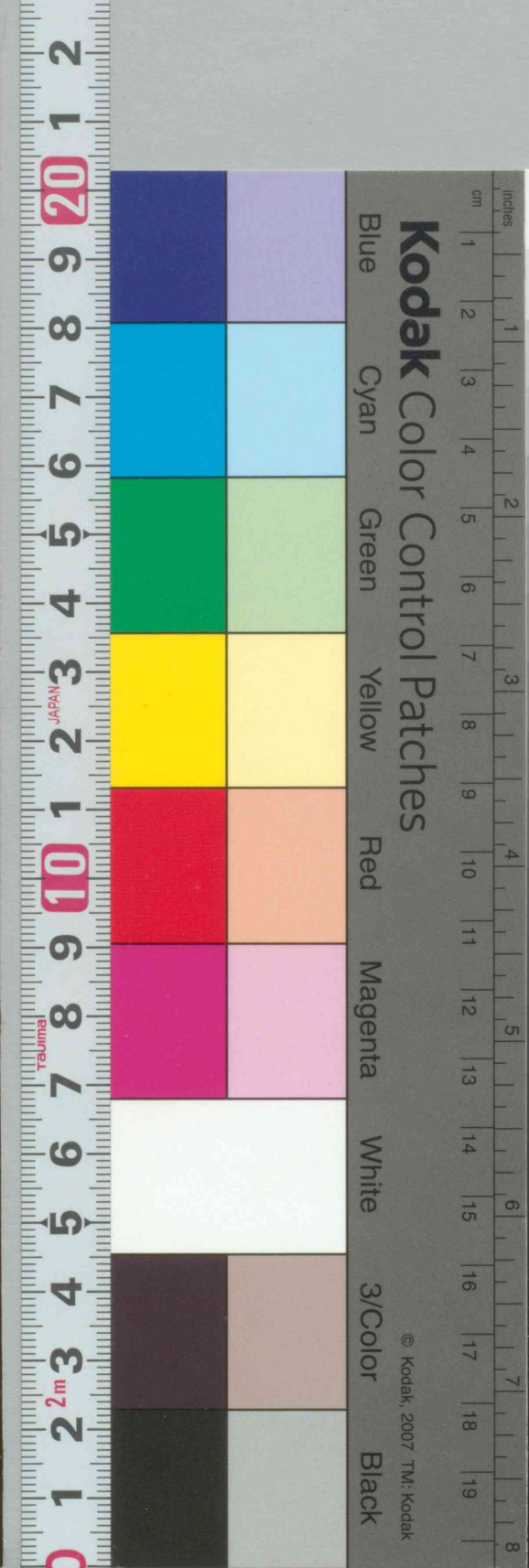


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
K12

女子副讀本

卷二



46
810
大12

女子副讀本 卷二

吉田彌平 篠田利英 共編
小島政吉 岡田正美

東京金港堂書籍株式會社



女子副讀本卷二

目次

一 二宮尊徳	幸田露伴
二 伊吹山	徳田秋江
三 三寶鳥	江馬修三
四 川しぶき	野口雨情
五 猫	夏目漱石
六 フルヘッヘンド	菊池寛
七 漂流物語	五十嵐力
八 留守	齋藤綠雨

目次

一

- 九 冬の歌……………三 木 露 風 三
- 一〇 忘れ得ぬ人々……………國 木 田 獨 歩 四
- 一一 タイタニツクの沈没……………和 田 垣 謙 三 一〇
- 一二 春日局……………福 地 櫻 痴 二四

女子副讀本卷二

文學者。

二宮尊徳。

一 二宮尊徳

幸 田 露 伴

天保七年の飢饉にあたり、駿河伊豆相模の小田原領の民の困苦最も烈しく、草根を掘り、樹皮を噛むほどなりければ、小田原侯、家臣をやりて、先生を野州より召出さんとし給ひけるに、先生肯ひ給はず、今凶歳の時にあたり、此の地の民を救はんとして寸隙だに無きに、我を召し給ふとは何ぞや。尋問の事あらば、君みづから來り給ふべし。と答へられけり。使者は拂りて、此の旨返り言申しけるに、我誤れり。事の仔

細も告げずして招かんとしたるゆゑ、其の様に答へしは道理なり。汝再び彼の地に至り、『加賀守過ちたり。』と二宮に傳へ、且『小田原領民飢渴に逼り居れば、早く來りて飢民を救ひ、我が心勞を安めんことを頼む。』と傳へ言ふべし。』と大久保侯の言ひたまへば、使者は復、櫻町に行きて委細を傳へけるに、此の度は先生命を奉じて此の地の撫恤終り次第、彼の地に立越えんよし答へられしかば、使者は悦び歸りけり。君侯此の事を聞き給ひ大いに悦んで群臣を召し、『二宮の功あるは既に明白なれば、之を賞する道なくてはあるべからず。祿若干を與へ、用人格に取立つべし。』と命ぜられけり。先生野州の處置を終へ直ちに、折しも君侯病發

して上下ともに憂ひわづらひけるが、侯は二宮來りし由聞きて大いに悦び給ひ、『先づ是を賞せよ。』と命ぜられ、いよいよ恩祿を下し給はんとする前日、麻上下を賜ひけり。普通の者ならんには恩賜の禮服とて悦び受くべきに、先生は之を見給ふより色を作して曰はるゝやう、これ小生には不用のものなり。謹みて返上いたさん。今數萬の國民飢渴に逼り、遙かに臣を呼出してこれを救ふことを命ぜられたれば、取るものも取りあへず出府いたせるなり。ひそかに思へるは臣の來るや否や、『如何にして民を救はん。』と問ひ給ひ、臣に下すに米粟を以てせらるゝならんと。然るにかゝる物を賜はらんとは思ひもかけず。此の禮服を寸斷して

飢ゑたる民に與ふとも何の用にか立たんや。無益の賜を受けんこと思ひも寄らざることなり。と。君侯これを聞きて「我過てり。其の物を二宮に與ふることなかれ。」とぞ云はれける。大久保侯も賢君といふべし。また役所より先生を招きければ、嗚呼われ今一時も早く小田原に行かんとするばかりなるに、我を役所に呼ぶものは我に祿位を與へんとするにはあらざるか。祿位を我一人受けたりとて、民に何等の益あらんや。與へんとせば千石を與ふべし。直ちに飢民に頒ち與へんのみ。と恐るゝことなく先生至當の論を吐かれけるに、侯またこれを聞き給ひ「二宮の云ふところ一々道理なり。祿位を與ふることなか

れ。今我が手元の金千兩を二宮に與へん。領民を助けんための米粟は小田原の藏を開くべし。外に金をも與ふべし。とて一々其の如くせられければ、先生直ちに小田原に行かれけり。大久保侯病中、二宮飢民救助のために小田原に行きしよし聞かれて、金次郎我が言を承知せしか。病中の安心何事か之に如かんや。と悦ばれけるが、それより日々に病重り行かれけるこそ是非なけれ。侯も自ら起たざること覺り給ひ、重臣たちを枕邊に召され、多年二宮を擧げんとして果さず。治國安民の任を彼に託するに及ばずして我が命こゝに盡くといへど、汝等志を繼ぎ心を合せ我が孫を補佐して

二宮を擧げ、國家を安泰ならしむべし。」と懇々と遺言して終に逝かれけり。

先生は大久保侯の命を受くるや否や早くも小田原に至り「君予をして窮民を救はしめんがため手元金千兩を我に賜ひ、米粟は小田原に於て藏を開き用に當てよと命じ給へり。速に米倉を開かん。」と。城詰のものら救荒の評議區々なるところへ云ひ出されければ、諸士一度は喜び又一度は疑ひ、「未だ米倉を開くべき由の命令我等に下らず。君命にあらずして倉を開かば後日の咎免れ難し。此の旨を早速江戸に伺ひて後、命あらば開くべし。」など云ふものあり、紛々として衆議決せず。先生其の時聲を勵まし、怪しかる人々の言

葉かな。今民の命旦夕に迫り、君侯病苦をも忘れられて之を救はんと憂ひ慮り給へり。然るに各位、君の爲に圖りて忠に民の爲に圖りて仁なるべき職に在りながら、君意民情を外にして咎を恐れ、空言空坐するは何事ぞや。われ來らずとも、先づ米倉を開き、民の死を救ひ、然して後君に告げ、自ら罪に服すとも尙可ならずや。然るに我君命を傳へても尙疑ひて江戸に伺はんなどは餘りに手緩し。往返の間に民の死する者それ若干なるべきか。されども各自身の罪を恐れて民の死を顧みざるやうの覺悟にては我言ふとも無益なるべし。唯此の評議決するまでは各位もまた斷食して民の飢苦を分ち給ふべし。飽食して、飢民を救ふこ

とを座上に空論せば何れの時か決せんや。小生も斷食して此の席に留らん。各位もまた斷食し給へ。と雷の落つるが如く警められければ、流石に衆人迷を去り、即刻倉を開くことに同意しけり。先生たち座を起つて米倉に走り、早速藏を開けと命ぜらるゝに、守者また君命なれば開かずといふ。先生また、然らば我と共に斷食せよと大音に諭されけるにぞ、遂に米倉を開きける。先生すなはち俵數を點檢し、運送の手配りを定め、終日終夜休み給はず、撫恤に心を盡されけるが、かゝるところへ、使來りて大久保侯卒去のよし告げ知らせけるに、先生此の由を聞きたまひて大いに悲しみ歎き、嗚呼已んぬるかな。我此の君に値遇してより十餘年、千辛萬苦を盡せるに事半ばにも至らずして卒去し給ひては、自今誰と共に此の民を安んぜんや。と前後不覺に哭かれしが、いたづらに歎きて何か益せん。今飢饉にして民の死生の時なるに、豈怠りて濟むべきや。一刻も空費せず、君の意を體して救ひ賑はさんのみ。と涕を拭きつゝ巡回し、及ぶだけの力を盡されければ、飢民のその救助に頼るもの四萬三百九十餘人、領内饑寒に死ぬるもの無かりき。されば人民みな深く此の恩を荷うて先生を慕ふこと、父母を赤子の慕ふが如くなりき。

大久保侯卒去の後、小田原の老臣等先君の命を奉じ、先生に

請うて領内に先生の方法を行はれんことを求めければ、先生乃ち根本よりして分度を定め、出入をはかる大法を説き聞かせられけれども、老臣等其の器にあらねば、其の説を行ふに堪へず、兎角に言紛らして根本の改革をなさず、たゞ實際に先生の道を行はれんことをのみ求めけるにぞ、先生も勢の如何ともし難きを思はれ、一二邑に手を下して例の如くに廢れたるを擧げ荒れたるを拓く道を施されけるにも、とより先生の徳には懐きたる民なれば、其の結果も早く擧りて徳風の及ぶところ、七十二村にまでわたりぬ。されども先生、しばし國本分度確立せりや否やを尋ねらるゝに、家老等は其は國家の大體なれば容易に決すべきに

あらずといふのみにて少しも埒明かず、遂に先生をして飄然と櫻町に歸らしむるに及べり。領民等は先生の去られし所以も行かれし處も知らねば、唯みづから誠意の足らざるを悔い居たりしが、櫻町に歸り給ひし由を聞きて、諸村の里正細民等わざと野州まで來り、衰邑興復の方法を歎き願うて止まねば、先生日夜教ふるに修身齊家の大道を以てし、日々數千言、皆其の人物に應じて諭さるゝに、至誠の教誨に感激して寢食を忘れ涙を流すものあるにいたりぬ。此の間先生の教を會して、故郷に歸り衰廢を擧ぐるものさへ少からず。

先生遂にまた民を憐む情已み難く、天保十年の冬野州を發し、小田原に歸られけるが、翌年の春はまた野州に歸り給ひけり。小田原領内の民先生の徳風に化し、競つて業に勉め辛苦に忍び、殊勝の行狀多かりければ、他邦の者さへ風を聞きて感じ合ひ、奮つて起ち、其の風に倣へるものもありけりとぞ。

然るに弘化三年にいたり、如何なる仔細にや、小田原にては先君以來の方法を廢し、領民の先生の許に往返することを禁止するなど、不法の處置多かりければ、さすがの先生も快快としてたのしまず、愀然として歎ぜられ、嗚呼我が道ここに廢せり。余、聞く、君子は天をも怨みず、人をも咎めずと。

予もまたたれをか怨みたれをか咎めん。みよ我が誠心の足らざるによるなり。我が道の本源たる小田原既に我が道を廢したるに、我他に行きて此の道を立てたらんには、これ小田原の非をあらはすに當りて、實に心くるし。諸方に施せる我が方法をも此の際一時に廢して以て小田原の非を掩はんか」と。

先生は理を見ることあきらかに、一生疑惑をいなくことすくなく、其の所信を斷行して、遂に有徳の實を收められたる君子なりしが、此の時は困苦心勞につかれられたりけん、小田原先君の墓に詣りて此の事を告げ、合掌禮拜時を移して如何なる心をか抱かれけん、默然として流涕これを久しう、

せられきとなん。其の後先生身を終ふるまで、心中常に小田原にふたたび民を安んずる道を行はんことをしきりに祈りつづけられけりとかや。讀むもの若し深く此の時の先生の心中を察するあらんには、誰かは感謝と同情との熱涙にむせばずして已むことを得んや。(二宮尊徳)

*名は浩司。文學者。

二 伊吹山 德* 田 秋 江

列車はその間に、近江の平野を過ぎてやがて、米原驛に着いて停車した。そこで北國筋に向ふ旅客を降して、新に二三

美濃國不破郡關ヶ原村にある。昔不破關のあつた處。

滋賀岐阜二縣の境にある山。四五二四尺。

美濃の關ヶ原附近より起つて、近江伊賀大和と伊勢との境を走つて紀伊山脈に連る山脈系。

の乗客を乗せると、再び急速力を出して駛走した。そのあたりから野は次第に狭くなり、左右に丘陵が迫つてきた。即ち列車は關ヶ原の陝隘に向つて分け入るのである。これまで幾度か東海道を往復して沿道の眺望には見飽いてゐるが、私は、近江美濃の境に跨る伊吹山を仰いで關ヶ原を通過する時ぐらゐ、何ともいへない感興に耽らせられることはないのである。箱根を越える時、また關西線によつて鈴鹿山を越える時といへども、この關ヶ原を通る時ほどこんな感慨に迫られることはない。

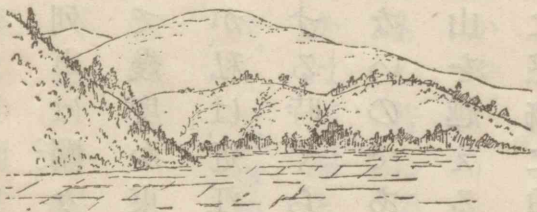
私は車窓から顔を出して、遙かに伊吹山の雄姿をながめてゐた。まだ朝じめりの乾きはてない午前、麗かに澄渡つ

た五月晴の碧空は、眩ゆきばかりに輝き、嫩かな新緑をもつていろどられた野山には、一面にあるとしもおぼえない白い霞が立ちこめてゐる。待つまもなく、その行手の空にあたつて、伊吹山の一角は列車の進む軌道の曲折につれて見えつ隠れつあらはれてきた。

「あゝ、伊吹山が見える。」と、私は思はず

山 獨語した。

すると、傍に横臥してゐた骨董屋は、其を聞いたと思はれて、もぞくぞ起き上りつゝ窓に顔を向



けて、

「あゝ、これが伊吹山ですか。」と言葉をかけた。

「えゝ、伊吹山です。好い山だ。私は感嘆の聲を放つた。さういふうちにも山の全身が車窓に向つて満幅の繪畫を開展して來た。

「なるほどこれが伊吹山ですか、よく伊吹といふことを聞いてゐたが、今はじめて見る。」

「好い山だ。今日はまた不思議にはつきりとよく見える。」私は重ねて感嘆の聲を洩した。まつたく今日くらゐ伊吹山をよく見たことは、二十餘年來屢、此處を往復してゐながら始めてゝあつた。伊吹山、何といふ記憶に懐かしい山で

あらう。私の幼年時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは、常に日本の歴史とその史跡に關聯せる地理とにあつた。私がこの伊吹山を覚えそめたのは、平治の亂に一敗地に塗れたる源義朝が、その時年やうやく十三の一子頼朝を連れ、わづかに鎌田政家等二三の家の子に擁せられて、東國をさして落ちゆく途中、雪のために父子道を失ひ、頼朝はつひに平家の追手に捕へられて六波羅の清盛が屋敷に引いて行かれた。日本外史に、伊吹山麓にとらへらる。とあるのが、どんなに私の哀感をそゝつたことであらう。私はそれをよく記憶してゐて、自分が十九歳の時始めて上京するときには、汽車の窓からこの伊吹山を眺めることを忘れな

京都東山の麓、
五條松原通の末
から、南七條通
の末に至る地の
總稱。
頼山陽が漢文で
書いた平氏より
武徳川氏の歴史の書
名。

つた。都をはなれ、失意の心を抱いて北國に落ちゆく人、或は東山道を経て遠き奥州のはてに歸る人、逢坂の關を越えて、湖水の彼方に比良比叡の峯々を遠く顧みがちに近江の野路をゆく間は、まだ後ろにしてゆく都の名残も偲ばれた。一度不破の關を過ぎてしまへば、都はいよゝゝ雲井の空にとほざかるばかりである。知らず古來幾人かこの山麓を過ぐるものが、憂愁に充てる眼をあげて山頂の雲を眺めたであらう。ある年は、晩秋初冬のころ、私はこゝを通つた。それは遠い外國に行つてゐて亡くなつた兄を弔ふために歸國して再び東國にかへる時であつた。雪模様の灰色の雲は、低く垂

れて黄褐色にうら枯れた伊吹山は憂鬱な空の表にはつきりと浮び出でてゐた。

またある年は、夏のをはりの時分こゝを通つた。その時私は中央線によつて名古屋に出で、漸く日の暮れそめるころ濃尾の平野をとほつて行くと、名古屋あたりから蒸すやりに暑かつた空は、一面に墨を流したやりに搔曇つて、千頃の青田には、もの／＼しい嵐が颯と波を揚げた。と思ふ間に、大粒の雨滴は早くも横ざまに車窓を打つて來た。風はますます強く吹いて、やがて銀箭の如き急雨は沛然としてやつて來た。その篠つく雨の音の中を、列車は轟々と響をあげて駛つて行つた。そして大垣を過ぎる頃には、さしもの

豪雨もいつしか止んで、沿道の草木は眞青に洗ひ清めたやうな艶な濡れ色をみせて、雨氣を含んだ冷かな風が開け放つた窓を流れるやうに吹いた。その時車窓の遠望はるか伊吹山の雄姿を認めた。その方の空には、まだ降り足らぬやうな凄じい夕立雲が黒く鎖して、漆を流したやうな嶮しい伊吹山は、夕暗の中に人を脅しさうに聳え立つてゐた。私はその雨後の伊吹山をも忘れることが出來ぬ。今日はまた珍しく五月の陽光の中に氣象の加減で稍距離を置いて、淡藍色に染めなされ明媚なる溫容を表示してゐる。

「好い山だ。うん、繪のとほりだ。すつかり繪になつてゐる。骨董屋も頻に感嘆して眺めてゐる。列車はその山麓

をめぐり、やがて漸次に西北の遠霞の中に山を残して過ぎた。

私は遂に山が見えなくなるまでも長く目送してゐた。

(車窓)

*文學者。

三 三寶鳥

江馬 修

酒屋の小僧の清松が、使先から珍しい噂を聞いて歸つた。それは、この頃千光寺に三寶鳥と言つて世にも不思議な鳥が來たといふのである。千光寺といふのは、飛驒の高山から三里ばかり奥深く分け入つた眞言宗の山寺で、この地方では有名な靈場になつてゐる。

彼はこの話を早速家中に吹聴した。

「二三日前に、千光寺の和尚様が、用があつて眞夜中に山を下る時、始めてその鳥が鳴くのを聞いたんですつて。わたしは、和尚様からぢかに聞いたといふ人から聞いたんですから、本當の話です。」

「そしてそりや一體どういふ鳥かな。」若い主人が帳場から大きな目をして物珍しさうに訊いた。

「そりや知りませんが、もとは天竺*にゐた鳥で、類の無い鳥ぢやつて話です。」

「そんな誰も知らない筈の鳥がよく和尚様にわかつたもんだな。」若い主人は馬鹿にした風で笑つて、そんな話をま

*印度。

るで信じない事を示すために、耳に挟んでゐた筆を執つて帳面に記入をはじめた。併し、千本格子の蔭で、長煙管を脚へて、話を聞いてゐた退屈な老母は、それに大變好寄心を挑發された。そして、お喋舌の清松を捕へて、根掘り葉掘り色色な事を聞かうとした。併し小僧はそれ以上は何も知らなかつたので、二人は限ない推量話に移つた。

「お前も馬鹿だよ。かういふ話はもつと委しく聞いて來るもんぢやに。」最後に老母は、なほ満足されない調子で、腹立たしさに清松に云つた。

その晩、老母の肩を揉ませる爲に、通りすがりの按摩を呼込むと、その按摩も三寶鳥の噂を聞いてゐた。彼は記憶の發

達した盲者に有勝な物識らしい口振で云つた。

「佛教では、佛に法に僧を三寶と申しますな。處で、この鳥は佛法僧といつて鳴くといふので三寶鳥、一名佛法鳥ともいふのですな。何でも鳩くらゐの大きさの鳥で、日本では、紀州の高野山と、も一つ奥州の何とかいふ山と、も一つ何とかいふ處と三個所にしかゐないといひます。それで千光寺へ來たのは、高野山から飛んで來たものだらうといふ事ですが、さてどういふものですかな。」

こゝで按摩は考深さうに首をかしげ、老母の脊筋を揉下げながらいひつゞけた。

「併しわしの考では、それは梟ぢやないかと思ふんですが

な。鳥の鳴聲なんてものは、聽者の思ひやう次第でどうにでも聞えるもので、假に佛法僧と鳴くと思つて聞いてみなさい。きつとさう聞えます……」

「どうせそんな事だらう。いや、さうに違ない。」

と主人は喜んで賛成した。

「馬鹿な、そんな事いひきれるもんか。」老母は大切な幻を破壊されでもしたかのやうに、本氣で怒つて云つた。

「千光寺のやうな靈あたまな山へ、さういふ靈な鳥が來ても、ちつとも不思議では無しさ。それに和尚様が聞いたといふのに何で間違があらうぞい。なあ清松。」

二三日経つと、土地の小さい新聞に三寶鳥に關する記事が

三段に亙つて書立てられた。それには單に噂としてよりも、記者の實驗した事實のやうに報告された。その爲に噂は一層喧傳されて、町では到るところ三寶鳥の話で持切る有様になつた。ある者はわざ／＼自分で聞きに行かうといひ出した。すると、外の者は、俗人にはそれが聞かれないのだといつた。その中に、町の一人が眞夜中に出かけて確かに聞いて來たといふ評判が立つた。續いて、誰も聞いて來た、彼も聞いて來たといふ風になつた。そして町のものでずきな退屈な人達は、我も／＼と出かけるやうになつた。

「今夜は三寶鳥を聞きに行くのぢや。これに味醂と焼酎を五勺づつ入れてくれ。」

夕方になると、清松の處へ瓢箪を持つてかういつて来る人が少くなかつた。その度に清松はその人が羨ましくて堪らなかつた。

「いゝなあ。俺も行きたいなあ。あんたの知つてる人で誰か聞いて来たのかいな。」

「来たとも。俺の友達はもう三人も聞いたといつてゐる。それぢや本當に違ないなあ。一體どんな鳴きやうをする鳥かしら。」

今では、かういふ人達が毎晩五六人づつは来た。さすがに若い主人は好奇心を焚附けられずにはゐなかつた。併し、彼は世にも珍しいその鳥の鳴聲を聞くよりも、この大變な

噂の真相を究めて、寧ろこの噂がまるで根も葉もないものである事を證據立てようといふ反感的な欲望に驅られた。そこへ清松の熱心なすゝめが加つて、ある晩、到頭彼等は一緒に千光寺山へ出かける決心をした。

靈鳥の鳴出すのは眞夜中の十二時頃からだといふので、その頃向ふへ著くやうにと、彼等は晩の九時頃に町を出た。清松は瓢箪を用意する事を忘れなかつた。月の無い薄寒い晩で、一面に星の光る空には天の川が白く流れてゐた。清松はこの美しい空を見ると、いかにも三寶鳥の鳴きさうな晩だと思つた。そして今夜は屹度聞かれるに違ないと思つた。

彼等が露を踏んで野を行く時、二三人づつ黒い人影が同じ方向へ歩いてゐた。その人達は皆三寶鳥を聞きに行く仲間であつた。まだ歸る人は無かつた。人達は皆、野に響く高い聲で鳥のことを議論し合つた。人達は必ず二派に分れた。靈鳥を否定する者と肯定する者と。若主人はその人達と一緒になつて否定派の爲に氣焔を吐いた。清松はどちらでもなかつた。唯どうかして一度さういふ不思議な鳥を聞きたいものだと思つた。

千光寺の麓へ來ると、柿や玉蜀黍や駄菓子（たごし）の夜店が三つも並んでゐた。もとより三寶鳥を聞きに來る人をあて込んでゐるので、これでも人がどれほど盛にやつて來るか、わ

かつた。流石に若い主人もこれには驚いた。そして實際に集る人は豫想より多かつた。彼等は皆群になつて、杉木立の繁りあつた深い山へ登りはじめた。あれ程一面にあつた星も、今は僅かに樹の間から微かに見えるだけになつた。丁度息をきらして五六町も山坂を登つた處に、神聖なもの（たがひ）とされてゐる有名な五本杉があつて、その黒々とした巨大な根方に人は皆集つてゐた。此處で三寶鳥が聞かれるといふのである。もう十二時を過ぎてゐた。これほど人が集つてゐても、流石に深山の眞夜中は人無きが如く、貫く事の出來ない寂寞と沈黙とに塞されてゐた。そして、僅かに蟲の音だけが細

細と聞えてゐた。併し、人はこの大沈黙に向つて絶えず自分達の存在を示さうと努めた。或者は不意に佛法僧の鳴く眞似をして人を笑はせた。甚だしいのは五本杉目がけて石を投付ける者もあつた。小石は、頭の上の黒い繁みでがさといつたかと思ふと、やがて底の知れない眞暗な谷底の石につき當つて跳返る音が、異様に、寧ろ物凄く反響した。中には眞面目の熱心に耳を澄してゐる人影も少くなかつた。併し、大沈黙の底からは、何等の靈音らしいものは固より、梟の聲さへも響かなかつた。そして蟲の音だけが際立つて耳にしみた。その中に馬鹿々々しさうに、待ちきれずに歸つて行く人が出來て來た。さつきから酒を飲みなが

ら、人に聞えよがしにこの噂の馬鹿々々しさを語つてゐた若主人も、一時になると、もう睡いから歸るといひ出した。彼は靈鳥が實際に鳴くのを恐れて、故意に聞かないで歸らうとしてゐるやうに見えた。清松はせめて明るくなるまで待ちたかつたが、主人の言葉に背けないので仕方なしに歸りかけた。

彼等は町への歸り途中で、なほ盛に出かける人達に會つた。そして清松の驚いた事は、彼等と一緒に聞かずに歸る外の人達が、出かける人に眞偽を聞かれる度に、確かに三寶鳥が鳴いたと揚言した事だ。そして清松自身さへも面白がつて、それをやつたのである。若い主人だけは、熱心に事實を

否定したが、出かける人はその言葉を喜ばなかつた。そして強ひても虚言者の出鱈目を證明の方に力を得て靈場へと急いで行くのであつた。彼等が家に歸つた時はもう夜明けの四時であつた。老母は、主人が得意になつて、あんな事は嘘だといふのを聞くと、いかにも不愉快さうな顔をした。そして、彼等が十分に待たなかつたから聞かれないのだといひ張つた。若主人は翌日から會ふ人毎に熱心に噂の虚偽である事を説いた。併し、噂はますます高くなるばかりであつた。それには清松も責任が無いとは言へない。何となれば、彼は人から質される度に、確かに聞いたといふ證明をしたから。

併し、流石に半月ばかりも経つと、町の人達はこの噂に疲れて來た。と、全く不意に、何時か三寶鳥が町の城山へ來て鳴いたといふ噂が廣まつた。續いて國分寺の銀杏でも鳴いたといふ人が出て來た。或財産家の主人が、夜中に確かに屋根の上で三寶鳥の鳴くのを聞いたといひ觸した。到頭ある朝、酒屋の老母も起きて出ながら、昨夜確かに三寶鳥に違ない鳥が家の庭で鳴くのを聞いたといつた。

一週間も経つて、今度は三寶鳥が奥州のある靈山へ飛んで行つたといひ觸された。それで、聞いたといふ者は固より、噂をする者もなくなつた。そして半箇月経つか経たない中に、町の人々は、あれ程夢中に話し合つた三寶鳥の事など

詩人。

はまるで忘れてしまつた。(愛と惜み)

川しぶき

野* 口 雨 情

さつさ行きましよ、

あゝの山越えて。

花は咲けども、

故郷の

月は朧に

川しぶき。

さつさ行きましよ、

名は金之助。
文學者。
大正二年歿す。

英國の僧侶で著
述家。
(七二八四)

あの川越えて。

花は散れども、

故郷の

月は懐かし

川しぶき。(現代詩人選集)

五 猫

夏 目 漱 石

かう暑くては猫と雖も遣り切れない。「皮を脱いで、肉を脱いで、骨だけで涼みたいものだ。」と、英吉利のシドニー・スミスとか云ふ人が苦しがつたと云ふ話があるが、たとひ骨だけにならなくとも好いから、せめて此の淡灰色の斑入の毛衣

だけは一寸洗ひ張りでもするか、もしくは當分の中、質にでも入れたい様を氣がする。人間から見たら、猫などは、年中同じ顔をして春夏秋冬一枚看板で押通す、至つて單純な無事な錢のかゝらない生涯を送つて居る様に思はれるかも知れないが、いくら猫だつて、相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度位あびたくない事も無いが、何しろ此の毛衣の上から湯を使つた日には、乾かすのが容易な事でないから、汗臭いのを我慢して、此の年になる迄錢湯の暖簾を潜つた事はない。折々は團扇でも使つて見ようといふ氣も起らぬではないが、兎に角握る事が出来ないのだから仕方がない。夫を思ふと

人間は贅澤なものだ。なままで食つて然るべきものを態々煮て見たり、焼いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり、好んで餘計な手数を懸けて御互に恐悅して居る。着物だつてさうだ。猫の様に一年中同じ物を著通せと云ふのは、不完全に生れ付いた彼等に對してちと無理かも知れないが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になつたり、蠶の御世話になつたり、綿畠の御情さへ受けるに至つては、贅澤は無能の結果だと斷言しても好い位だ。衣食はまづ大目に見て勘辨するとした所で、生存上直接の利害もない所まで此の調子で押して行くのは、毫も合點が行かぬ。第一頭の毛など

と云ふものは、自然に生えるものだから、放つて置く方が最も簡便で、當人の爲になるだらうと思ふのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好を拵へて得意がつてある。坊主とか自稱するものは、いつ見ても頭を青くして居る。暑いと其の上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。是では何の爲に青い物を出して居るのか、主意が立たんではないか。さうかと思ふと櫛とか稱する無意味な鋸様の道具を用ひて、頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分しないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人爲的の區劃を立てる。中には此の仕切がつむじを通り過して後ろまで食み出して居るのがある。丸で贗造の芭蕉葉の様だ。

其の次には腦天を平かに刈つて、左右は眞直に切落す。丸い頭へ四角な粹をはめて居るから、植木屋を入れた杉垣根の寫生としか受取れない。此の外五分刈三分刈一分刈さへあると云ふ話だから、仕舞には頭の裏まで刈込んで、マイナス一分刈、マイナス三分刈などといふ新奇なのが流行するかも知れない。兎に角そんなに憂身を窶して、どうする積りか知らん。

第一、足が四本あるのに二本しか使はないと云ふのだから贅澤だ。四本であるけば夫だけはかも行か譯だのに、いつでも二本で済して、残る二本は到來の棒鱈の様に手持無沙汰にぶら下げて居るのは馬鹿々々しい。是で見ると、人間

は餘程猫より閑なもので、退屈の餘りこんないたづらを考案して楽しんで居るものと察せられる。但し、可笑しいのは、此の人間がよると障ると多忙だ〜と觸れまはるのみならず、其の顔色が如何にも多忙らしい。わるくすると多忙に食ひ殺されはしまいかと思はれる程こせついで居る。彼等のあるものは、吾輩を見て時々、あんなになつたら氣樂でよからう。などと云ふが氣樂にすればよい。そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ譯でもなからう。自分で勝手な用事を手に負へぬ程製造して、苦しい〜と云ふのは、自分で火をか〜起して、暑い〜と云ふ様なものだ。猫だつて、頭の刈方を二十通りも考へ出す日には、かう氣樂

にしては居られんさ。氣樂になりたければ、吾輩の様に夏でも毛衣を著て通されるだけの修業をする方がよらしい。〜とは云ふものゝ少々暑い。毛衣では全く暑過ぎる。是では一手專賣の晝寐も出來ない。何かないかな。永らく人間社會の觀察を怠つたから、今日は久しぶりで彼等が酔興に齷齪する様子を拜見しようかと考へて見たが、生憎主人は此の點に關しては頗る猫に近い性分である。晝寐は吾輩に劣らぬ位やるし、殊に暑中休暇になつてからは、何一つ人間らしい仕事をせないので、幾ら觀察をしても一向觀察する張合がない。こんな時に、迷亭^{*}でも來ると、胃弱性の皮膚も幾分か反應を呈して、暫くでも猫に遠ざかるだらう

*主人の友で奇抜で呑氣な人。

に、先生もう來ても好い時分だと思つて居ると、誰とも知らず風呂場でざあ／＼水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな聲で合の手を入れて居る。「いや結構。」どうも好い心持だ。「もう一杯」などと家中に響き渡る様な聲を出す。主人のうちへ來て、こんな大きな聲とこんな無作法な眞似をやるものは外にはない。迷亭に極つて居る。

愈來たな、是で今日半日は潰せると思つて居ると、先生汗を拭いて肩を入れて例の如く座敷までづか／＼上つて來て、「奥さん苦沙彌君はどうしました。」と呼ばはりながら帽子を疊の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏し

主人の名。

て好い心持に寐て居る最中に、わん／＼と何だか鼓膜へ應へる程の響がしたので、はつと驚いて覺めぬ眼をわざと睜つて座敷へ出て來ると、迷亭が薩摩上布を著て、勝手な處へ陣取つて、頻に扇使ひをして居る。

「おや入らつしやいまし。」と云つたが少々狼狽の氣味で、ちつとも存じませんでした。」と鼻の頭へ汗をかいた儘御辭儀をする。「いえ今來た許りなんですよ。今風呂場でお三に水を掛けて貰つてね、漸く生き返つた所で——どうも暑いぢやありませんか。」此の兩三日は、たゞじつとして居ましても汗が出る位で、大變御暑う御座います。——でも御變りも御座いませんで。」と細君は依然として鼻の汗をとらない。

「え、有難う。なに暑い位でそんなに變りやしませんや。然し此の暑さは別物ですよ。どうも體がだるくつて。」私なども、ついで晝寐杯を致した事がないんで御座いますが、かう暑いと、つい……」
「やりますかね。好うございますよ。晝寐られて、夜寐られりや、こんな結構な事はないのでさあ。」と相變らず吞氣な事を並べて見たが、夫だけでは不足と見えて、私なんぞ寐たくない質でね。苦沙彌君などの様に、來るたんびに寐てゐる人を見ると羨ましいのですよ。尤も胃弱に此の暑さは應へますからね。丈夫な人でも今日なんかは、首を肩の上に載せてるのが大儀でさあ。さればと云つて載つてる以上はもぎとる譯にも行かずね。」と迷亭君

いつになく首の處置に窮して居る。「奥さんなんぞ、首の上へまだ載つけて置くものがあるんだから、坐つちや居られない筈だ。鬚の重みだけでも、横になりたくありませんよ。」と云ふと、細君今まで寐て居たのが鬚の恰好から露顯したと思つて、「ほ、口の悪い。」と云ひながら頭をいぢつて見る。「迷亭はそんな事には頓著なく、奥さん、昨日はね、屋根の上で卵のフライをして見ましたよ。」と妙なことを云ふ。「フライをどうなすつたんで御座います。」屋根の瓦が餘り見事に焼けて居ましたから、只置くのも勿體ないと思つてね、バタをとかして卵を落したんでさあ。「あらまあ。」所が矢つ張天日は思ふ様に行きませんや。中々半熟にならないから、

下へ降りて新聞を讀んで居ると、客が來たもんだから、つい忘れて仕舞つて、今朝になつて急に思ひ出してもう大丈夫だらうと上つて見たらね。「どうなつて居りました。」「半熟所か、すつかり流れて仕舞ひました。」「おや／＼。」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。「然し土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですね。」「ほんとで御座いますよ。先達中は單衣では寒い位で御座いましたのに、一昨日から急に暑くなりましてね。」「蟹なら横に這ふ所だが今年の氣候は後しざりをするんですよ。倒行して逆施す又可ならずやと云ふ様な事を言つてるかも知れない。」「なんで御座います、それは。」「いえ、何でもないので。ど

*史記の伍子胥傳に「吾、日暮れ道遠し、吾、故に逆施するなり。」とある。

*ヘラクレスともいふギリシアの神話上の最大の勇者。

うも此の氣候の逆戻りをする所は、丸でハーキェリズの牛ですよ。」と圖に乗つて愈變ちきりんな事を云ふと果せるかな細君は分らない。然し最前の「倒行して逆施す」で少々懲りて居るから、今度は只「へえ」と云つたのみで問返さなかつた。これを問返されないと、迷亭は折角持ちだした甲斐がない。「奥さんハーキェリズの牛を御存じですか。」「そんな牛は存じませんわ。」「御存じないので。一寸講釋をしませうか。」と云ふと、細君もそれにはおよびませんとも言ひかねたものだから、「え」と云つた。「昔ハーキェリズが牛を引張つて來たんです。」「そのハーキェリズと云ふのは牛飼でも御座いますか。」「牛飼ぢやありませんよ。牛飼や

*東京に多くある
牛肉屋の家號。

いろはの亭主ぢやありません。其の節は希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね。「あら希臘の御話なの、そんならさうと仰やればいゝのに。」と細君は希臘といふ國名だけは心得て居る。だつてハトキ・リズぢやありませんか。「ハトキ・リズなら希臘なんですか。」えゝハトキ・リズは希臘の英雄でさあ。「どうりで知らないと思ひました。それで其の男がどうしたんで……」其の男がね奥さん見た様に眠くなつてぐうぐう寐て居る……。「あらいやだ。」寐てゐるあひだに、ワルカンの子が來ましてね。「ワルカンて何です。」ワルカンは鍛冶屋ですよ。此の鍛冶屋のせがれが其の牛を盗んだのでさあ。ところがね、牛の

尻尾を持つてぐいぐい引いて行つたもんだから、ハトキ・リズが眼を覺して、牛やい、牛やあい。と尋ねてあるいても分らないんです。分らない筈でさあ、牛の足跡をつけたつて、前の方へあるかして連れて行つたんだぢやありませんもの。後ろへ後ろへ……と引きずつて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出来ですよ。」と迷亭先生は既に天氣の話は忘れて居る。

「時に御主人はどうしました。又午睡ですか。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙彌君の様に目課としてやるのは少々俗氣がありますね。何の事もない、毎日少し宛死んで見る様なものでは。奥さん御手数だが一寸

起して入らつしやい。」と催促すると、細君は同感と見えて、「ええほんとにあれでは困ります。第一あなた、體が悪くなる許りですから。今御飯を頂いた許りだのに。」と立ちかける。と、迷亭先生、奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯を頂かないんですがね。」と平氣な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。

「おやまあ、時分時だのに、ちつとも氣が付きませんで——夫ぢや何も御座いませんが御茶漬でも。」「いえ、お茶漬なんか頂戴しなくつても好いんですよ。」夫でも、貴方どうせ御口にあふ様なものは御座いませんが。」と細君少々厭味を述べ。迷亭は悟つたもので、「いゝえ、御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂へて來ましたから、そ

文學者。

明和八年の三月、四日、江戸千住小塚原に罪人の小塚原があつたの解割が行つた。此の人は三月五日に行つた。翌日、と三月五日、前野良澤・杉田玄白・中川淳庵・小杉玄適。

今、東京麴町五平河町。前野良澤は中津藩の蘭醫と稱す。享和三年、明治二年、正四位を贈られた。

れを一つこゝで頂きますよ。」と到底素人には出來さうもない事を述べる。細君はたつた一言「まあ」と云つたが、其の「まあ」の中には驚いた「まあ」と氣を悪くした「まあ」と、手数が省けて有難いと云ふ「まあ」が合併して居る。(吾輩は猫である)

六 フルヘッヘンド

菊池 寛

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づつ相會した。

良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。

良澤は三人の人々に蘭語の手ほどきをした。彼は、道に長

崎へ留學したことがあるだけに多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど言ふに足りなかつた。一月ばかり経つと、良澤が三人に教へることは、もう何も残つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は始めてターヘルアナトミ＊アの書に向つた。

が、開卷第一の頁から、たゞ艣舵なき船の大洋に乗出した如く、茫洋として、何處から手の附けやうもなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。

が、二三枚めくつた處に仰向けにした人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體内景の事は知りがたいが、表部外

＊ オランダの解剖書

象の事は、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と説の中の符號とを合せ考へることが一番取付き易いことだと思つた。



前野良澤

彼等は、眉・口・唇・耳・腹・股などに附いて居る符號を文章の中に探した。そして、眉・口・唇などの言葉の一つ一つ、覺えて行つた。が、さうした單語だけは分つて

も、前後の文句は彼等の乏しい力では、一向に解し兼ねた。一句一章を、春の長き一日考へあかしても、彷彿として明められないことが屢あつた。四人が二日の間、考へぬいて、や

つと解いたのは眉とは目の上に生じたる毛なり。」と云ふ一
句だつたりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑し
ながらも、銘々嬉し涙が眼の裡に浸んで來るのを感じずに
は居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の處へ來たときに、四人は「鼻とはフル
ヘッヘンドせるものなり。」と云ふ一句に、突當つてしまつて
居た。

無論完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が、長崎から持歸つ
た小冊子にフルヘッヘンドの譯註があつた。それは、木の
枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除す
れば、その塵土聚りて、フルヘッヘンドをなす。」と云ふ文句だ

つた。

四人はその譯註を引合せても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド、フルヘッヘンド。」



杉田玄白

四人は折々その言葉を口ずさ
みながら、巳の刻から申の刻ま
で考へぬいた。四人は目を見
合せたまゝ、一語も交へずに考
へぬいた。申の刻を過ぎた頃

に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々、斯様で御座る。木の枝
を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土

小濱藩の蘭醫。明治四十五年正四位を贈られた。

今の午前十時頃。今の午後四時頃。

聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば鼻は、面中に在りて、堆起するもので御座れば、フルヘッヘンドは堆しと云ふことで御座らうぞ。」と云つた。

四人は手を拍つて喜びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼人喜は、連城の玉を獲たよりも勝つて居た。

が、シキケイ神經などと言ふ言葉に至つては、一月考へ續けても解らなかつた。

彼等は最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初一年の間どの頁にもどの頁にも、轡十文字が無數に散在した。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は凡てを征服せずには

支那古代の有名な玉。

蘭學研究の先驅者。

居なかつた。一ヶ月六七回の定日を怠なく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え章句の脈も明かに、書中の轡十文字は、殘少くかき消されて居た。先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみか知る喜で酬いられて居た。語句の末が明かになるに従つて、次第に甘蔗を噉ふが如く、その中に含まれた先入未知の眞理の甘味が、彼等の心に浸付いて居た。彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏入れ得る喜で、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明るのを待兼ねるほどになつて居た。(蘭學事始)

早稲田大學教授。

七 漂流物語

五十嵐 力

見渡せば目も届かぬほどの廣野、其の隅から隅まで一面に眞白な大鳥が並んでゐて、足の踏みどころもない。其の夥しい鳥の間をかきわけ、通り行く數人の男がある。髪は亂れ、顔は青ざめ、目はくぼみ、頬はこけて、やつれはてた様子、はぐれぬやうに「ほうい」と呼びかはしながら、南へ南へと進んで行く。鳥の大きさは片翼をひろげただけで凡そ七八尺もあらう。人を怖るゝ氣色は少しもなく、押しにくればさつと開くが、やがて返つて來て、前後に集る。譬へば鳥の翼の漫々たる波の間を、七八個の頭顱が泳いでゐる

信天翁鳥。

やうに見える。

一行はしばらくして廣野を歩きつくして南の端の崖へ出た。向ふを望むと、遙かの磯邊に人の姿が唯一つちらりと見える。氣を附けて見たが、人間に相違ない。一同は狂喜して駈けて行かうとしたが、脚下の懸崖を下るべきやうがないのに困じ果てた。喉を限りに呼んだが、聲が届かぬ。それから蔓や木の根にすがりつゝ、かれこれ工夫して、やうやく山坂を下つて行くと、彼方も見つけて、手招をして道を教へ、出迎へて一禮した。

數人の者は聲を揃へて此の島の名を尋ねた。迎へた一人は、此の島は名もなき無人島で、我等も三年以前に吹流され

光格天皇の御世、松平定信の老中であつたとき、
三河六、伊豆國の沖にあ
る小島。

て、今までたつた一人生甲斐もない月日を送つて居た。といふ。
時は是天明八年二月初處は鳥島の南岸。初の數人は大阪北堀備前屋龜次郎の持船の舟子で、仙臺荒濱の城米を積受けて下るために、天明七年十一月二十八日、相州の三崎を出帆したが、房州の鼻をまはり、九十九里の灘を走つて、其の夜の四時、頃犬吠岬の尖端へ差しかゝると、俄の大暴風に大雪さへ降つて來た。空は眞暗で咫尺をも辨ぜぬ。舟は大浪に揺られて木の葉の如く漂ふ。舟子等は命限りに働いたけれども、遂には手の盡しやうがなく、風のまにまに吹流

陸地の方

されて、怒濤の上に其の夜を明した。明けて二十九日の朝になつても、まだ風は止まぬ。己むを得ず帆柱を切捨て、船中一同髪を切つて神佛に祈願をこめ、船の中へ打込む水あかをしきりに汲取つて、凌いで居たが、一晝夜引續いた命がけの働に疲れ果て、もうこれまでと覺悟をして居ると、其の中に波風が段々和いで、苦痛も少しづつ弛んで來た。やれ嬉しやと思つて居る中に、東風が吹いて來る。之では地方へ心がけて走らうと、早速間に合せの帆を捲へ、水桿などを結び合せて帆柱とし、陸地の方へ志して三三日走つたけれども、土地の影も見えぬ。其のうち又々大暴風になつて、五六日の間激浪怒濤に弄ばれ風のまにまに流れて行つ

たが、忽ち島山の目に留つたのが、此の無人島、即ち今の鳥島であつた。其の邊より又大島川が、一同は天の祐と勇み立つた。何國にてもあれ、一命だけは助かつた、いざ急いで陸へ上らうと帆を押張つて暫時の間に磯邊に近づいた。丁度正午時分のことであつた。さて島の西の前沖に碇をおろして、島の様子を見ると沖の中の離れ小島と覺しくて人家も見えぬ。一同顔見合せて躊躇したが、本船はもはや水船になつてゐる。其上、水も缺乏して來た。是非がない、上陸しようかと相談して居るうちに、山おろしが激しく吹きまはして、碇綱がすりきり、危く吹流されようとした所を、手早く舳を卸し、鍋釜着替など、あらま

し取込んで乗り移り、本船より離れて辛うじて島に着いた。丁度天明八年の正月晦日の事である。

久しぶりで地を踏んだ嬉しさは言葉には盡されぬ。が氣にかゝるは舳の始末である。故郷へ歸る一縷の望は、繋いで此の一葉の小舟にある。何とかして丈夫に繋いで置かうと思つたが、荒磯の岸が殊の外高いので繋ぐべき恰好の場所がない。己むを得ず上陸した處に繋いで、さて住處はと搜すと、磯の岩の下かげに、少しばかり雨をよけ得る處がある。これ幸とこれを當座の住處に定め、夕飯には粥を拵へ、打寄つて久しぶりで落ちついた食事をした。夜に入つてからは、此の數日間の艱難辛苦の話、行末の心細い話に涙

を灑ぎ、積日の草臥にたわいもなく寐入つてしまつた。あくる日は又しても大あらしになつた。一同早起きして舩を見まはり、念入りに繋ぎ直して、それから泉があるかと尋ねまはつたが、一向に見つからぬ。是非なく石の室に溜つた水を取集めて飲水にし、米も少くなつたので、貝類を採つて補ふことにした。さて其の翌朝の事、雨風の強く吹くのに驚かされて舩を見まはると綱がすり切れて、船が見えなくなつてゐる。皆々手足をもぎ取られた思して驚き悔んだけれども、仕方がない。絶望の色は忽ち一同の顔にあらはれた。此の上は、此の島に永住の覺悟をせねばならぬと思ふにつけても、故郷の事などが頻に思ひ出されて、生き

ながらへた心もなく、茫然として何事も手につかぬ。其の中に飯米は益、乏しくなる、之を補ふ爲に濱邊をかけまはつて磯貝を採つたが、上手の方に道らしいものを見つけて段登つて行く中に、岩の下かげで、古槍一枚、釣竿一本、草履一足を見いだした。さては此の島にも人が住むかと、寄り集つて、驚き喜ぶ。たゞ其の草履が日本の藁ではなく見馴れぬ草で作つてあるので不安心にも思つたが、とにかく人が居るに相違あるまい。人といへば仇かたき山賊、海賊でも戀しい。我等が辛苦も話したい、此の島の生活法も聞きたい。すぐにも此の道を辿つて出かけようかと逸る者もあつたが、もはや夕暮、明日こそと、其の日は例の岩屋に歸り、翌

日は早朝より握飯を拵へ、前の道を慕うて上へくと進んだ。險阻な岩陰の焼石を踏んでしばらく上ると、茅薄茫々と生ひ茂つて歩くべき隙もない處へ出た。いろ／＼工夫して、押分け／＼通り行くこと暫くにして、忽ちからりと開けた處が、大鳥の隙間もなく一面に並んでゐた前の廣野であつたのだ。

大阪船の舟子達は、搔いつまんで今日までの閱歷を話してほつと息をした。

三

話しかけられた男は土佐の國の船頭、名を長平といつて、三年前の天明五年二月、他の水夫三人と共に、此の島に流れ着

いた者である。流れついて、命は首尾よく助かつたが、火道具を持合さず、生魚生鳥を食つたためか俄に健康を害し、皆腫病のやうになつて、乗組の三人はわづか二十日足らずの中に引きつゝいて命を殞し、長平唯一人、やう／＼今日までながらへたといふ。見れば面色は青く、眼は赤く、三年の間月代さかを剃らねば、誠に此の世の人とも思はれぬ、一同はあはれに思つて、携へて來た握飯を一つ取出して與へた。長平は夢かと喜んですぐに口にしたが、忽ち吐き出して勿體ないことながら、平生生鳥を食馴れた爲か、戴かれぬ。と言つて、餘りを返した。

尙長平の話を聞くと、此の島には穀類がない。常食として

は、第一に前の大鳥、次には魚貝を用ひる。但し大鳥は夏の百日ばかりの間、悉く何處へか行つてしまふ故、冬の間一人前百羽程ほし上げて、夏の食料に蓄へておかねばならぬ。各、方も只今から其の用意にかゝらねばなりません。といふ。一同は吸込まるゝやうに耳を傾けた。疲れた身に立話もお苦しからう、此處よりは、むさくるしいけれど我が宅へ」と、長平はさきに立つて案内した。無論見る影もない小家である。火がないので殊に淋しい。室の隅に大鳥の卵を四五十立て並べて、其の中に水を蓄へてあつたが、一個に三四合は入る。夫を一個づつ茶の代りにすすめた。さて其の夜は長平の小屋で語りあかし、それより

互に一家の如く心易くして火にかけた鳥の料理に舌鼓を打ちつゝ十日ばかり逗留したが、大阪舟子等の住居の方が水や其の他の便宜がよいといふに相談がまとまり、一同長平を伴つて、もとの場所に立歸つた。

四

同胞を見出す、生活法を覺える、不幸中にもどうやら氣が落ちついて來た。それにつけてもまづ必要を感じるのは住處である。此の上は小屋がけなりともして雨露を凌がると、早速然るべき岩穴を見立て、土を運び、地をならし、茅を刈寄せて、粗末ながら人間の住家らしいものが出來上つた。其のうち、鳥捕りは馴れる、魚捕りも巧になる、日々の生活

にもいくらか餘裕が出て来る。従つて退屈もする、遊び楽しみもしたくなる。かくして遂に島の内見物の相談が出て連れ立ち、茅薄をわけ、大鳥の群をわけ、岩を攀ぢ、險阻を冒して、到らぬ隅なく探らうといふことになつた。

島の周圍は凡そ三里、直徑一里ばかりもあらう。段々探るにつれて、此の無人島にわびしい生活をした者の自分等だけではないことがわかつた。雨風を避け易い處或は濱邊の洞窟ほらなどには、往々人の住んだらしい跡がある。或は風防の石垣を築いた處がある。或は作物を仕つけたらしい處がある。或洞穴の中には鍋釜を始め世帶道具の腐れたのが、半ば土に埋れてあり、三尺ばかりの朽ちかけた板に

は南部行の遠州船が元文三年正月漂着したといふ意味の文字があつた。或穴の中には、幡天蓋珠數などを入れる櫃があり、其の傍に枕をしたまゝ横たはつて居る白骨があつた。見るにつけて吾々がつひの運命も此の通りかと人事ならず哀を催し、石塔を建て、心ばかりの供養をした。

悲しい中にも多少面白いことが無いではない。處も隔り、氣候もかければ、鳥獸蟲魚草木などにも、それ〴〵珍しいものがある。煙草の無いのに困つた揚句、やうく「まゝやくな」といふ草を捜しあて、吸うた嬉しさ、「ぶら」といふ魚の皮で三味線を張つた時の喜ばしさ、大鮫の磯近く來て龜を呑み大鳥を呑む恐しさ、鶉に似て色の黒い鳥が夜明を知らせ

る珍しさ、内地の品物の流れ寄る懐かしさ、三年後に胡麻小豆唐がらしを得たうれしさなど、心ゆく事もいろ／＼あつたが、最も無聊を慰めたものは例の大鳥である。鳥は鶴より餘ほど大きく、片羽根をのばしたゞけで七八尺はある。九月頃此の島へ渡つて、土用に卵を産み、雌雄の親鳥二羽十四日づつ代る／＼温める。霜月の末に鳥になる、其の時は色が黒い。それより五月の末迄は親鳥が魚や貝や炭や竹の根などをくはへて来て、初の中は腹の中で水にして口移しに與へるが、後には物のまゝでよい程に切つて口移しにくれる。その口移しのしやうが面白い。親鳥の嘴の横に口を閉めても合はぬ透間がある。子鳥はそこへ

嘴のさきを入れて物を食ふ。此の鳥が巢を造る時は、激しく場所を争ひ、互に喰ひついて一日も二日も離れず、遂には雙方血まみれになることがしば／＼ある。巢の造り方は土を三尺程掘つて、藁を入れ、土をかけ、其の中へ卵を二つ産みおとして温める。卵を取つて代りに石を入れて置けば、それを何時までも温めてゐる。此の鳥の卵はかうして取つて食物にするので、又鳥を捕るには、巢鳥の外へ出る所を窺ひ、まはり四五寸の長い棒で首筋を打てば、そのまゝ死んで了ふ。打ちそこなつて喰付かれるとあとがだいぶ痛むけれども、其の鳥の賦あたらをつけておけばやがて癒る。最も見事なのは、此の鳥の島を立退く時で、五月の末になると、島中

の大鳥が打揃ひ、千鳥のやうに濱邊へ行つて一夜を過し、翌日になつて、羽うちかはしつゝ、残らず立退く。其の時は海も空も一面に鳥ばかりになつてしまふ。又此の大鳥が時々、二羽向きあつて嘴を鳴らし、羽根を伸し、頭を下げ、前へ進み、後へ退き、聲をあげつゝくるり／＼とまはつて居ることがある。他の鳥も之を見ると、一緒になつて、三四羽づつ組をなして踊りさわぐ。全く鳥の舞踏でも見るやうで、その見物に隙を費すことも屢であつた。

五

旅は道づれといふ。無人島に居て戀しきは人待たるゝは船である。彼等は明けても暮れても海面を望む。船は來な

いか、見えないか。といふ詞が、一日に幾たび繰返されたか知れぬ。漂着した翌年、一艘の船が島近く現れた。一同夢かとばかり喜んで早速火を揚げて助を求めたが、船は五六日島の周りをめぐつて遂に何處ともなく去つて了つた。かくて、はかなく月日を送つて三年目の正月の或日、島から六里ばかり隔つた沖中に一艘本船が見えた。段々近く寄つて碇をおろし、舳に移つて漕寄せて來たが、岸邊に立つた一同を見て躊躇して居る。鳥の羽を着た異形の姿に恐れたのであらう。かれこれするうち、高浪に搖られてあわただしく磯邊へ漕入つて來た。乗組六人、薩州船が日向灘で暴風に遭つて漂流したのであつた。此の船人の話によつ

て、始めて、此の日が寛政二年正月晦日であることがわかつた。友が殖える。舢が手に入る。枯木の春に逢つた心地、歸郷の望がまた、芽をふいて來た。今度こそ舢を波にとられぬやうにと、念入りに丈夫に繋いで、さて新米の珍客を住家に導いて休ませ、翌朝波が靜かになつてから、その舢を引き上げようと楽しんで居たが、その夜荒磯に打付けられて壊れてしまつた。掌中の寶は又も奪はれて、若しやの頼もあだとなつた。何といふ拙い運命であらう。薩摩船の漂着によつて幸福をましたのは、硯筆、墨、鑿、鋸、斧、金槌、其の外の小道具の殖えたことである。鍋釜も殖えた。

剃刀も此の時手に入つて、各、俄に器量を上げた。唯一つ困つたのは蚊の新たに輸入されたことであつた。薩摩船の舟子が來てから、一つ穴の住居も狭くなつたので、二人三人づつ別々の穴に住まふことにした。かくて數個の小家族が成立ち、吉凶音問の慰めなども出て來て、小さいながら一つの郷黨を見るやうになつたが、世の果敢なさは此處も同じく、一つには食物の悪いため、二つには氣を痛めた爲であらう、病死するものがおひ／＼出て來た。有り餘る人の中でも死別はつらい。況して是は總勢やうやく十人の孤島生活、一人だにあるを、僅かの間、に四人まで喪つた一同の悲嘆は言葉に盡されぬ。中でも人々に力を落させ

たのは荒濱生れの忠八といふ舟子の死亡したことであつた。此の男は賑かな質で、歌も歌ふ三味も弾く、常に絶望仲間の慰め手として、一同の氣を引立て、居つたが、この男が死んでからは、酒もなく見る物もなく子供も居らぬ無人島が火の消えた様に淋しくなつた。死ぬ者は皆臨終には、死後には形を隠してくれよ、後世を弔つてくれよと懇に頼む。残る者も是がやがて自分等の運命かと、いふにいはれぬ心細さである。仲間のうちで、薩摩船の船頭は氣の利いた男で、死人には一々戒名をつけ髪剃をしてやつた。其の後一火葬にして骨を取置き、塚の印に石塔を建てた。その序に前代からの死亡者にも悉く石塔を建て、やつた。

彼等の夢寐にも忘れぬは故郷の事である。昔語に雁の音づれるといふこともあるものを、何がな吾等の有様を故郷人に知らせる工夫はあるまいかと考へたが、或時件の大鳥の中に、首に繩をかけたのがあるのを見出した。是屈竟と早速木札を百枚ほど造り、漂着の次第を書いて鳥につけて放したが、翌年になつて一羽も歸つて來ぬ。又鳥の中に釣針を吞んで居るものもあつたが、悲しいことには、それが日本の釣針ではない。思ふ事、試みる事、悉く失敗して、しみじみと世の味氣なさを覺る。それにつけても罪深く感ずるのは日毎に多くの鳥を捕ることである。食物が無いから已むを得ぬとはいふものゝ、かやうな殺生をするといふの

も前世の因縁であらう。一人一日一羽づつなれば一日には十四五羽を殺す、一年には五六千羽、十年積れば五六萬羽、この鳥の思だけでも、ろくな往生は遂げられまい。萬一故郷に歸ることもあらば、鳥類は決して食ふまいと、神佛に願を立て、珠數を拵へて、時々念佛を唱へ、精進日をきめて、其の日は一日鳥を食ふことを休んだ。かやうな間に、秋になつても鳥の渡らぬことなどがあると、いよく、殺生の報であらう、是からは何を以て露命をつながうなどと、心を痛める。其の時に新鳥の渡つて來るのを見る嬉しさ。かくて心ならずも、罪と知りつゝ、殺生を事としてゐるあひだに、或日日蓮宗の御札が流れ寄つた。一同は之を見て盲龜が浮木を

得たやうに喜び、皆々法華宗の信徒になり、札の流れ寄つた處に堂を建て、厚く供養した。

六

大阪船の舟子に三之助といふ、若者が居つた。手の利いた男で、或時寄木を集め、斧一挺の細工に長さ三尋程の釣船を造つたが、これが種となつて本國歸航の大船を造る計畫が企てられた。

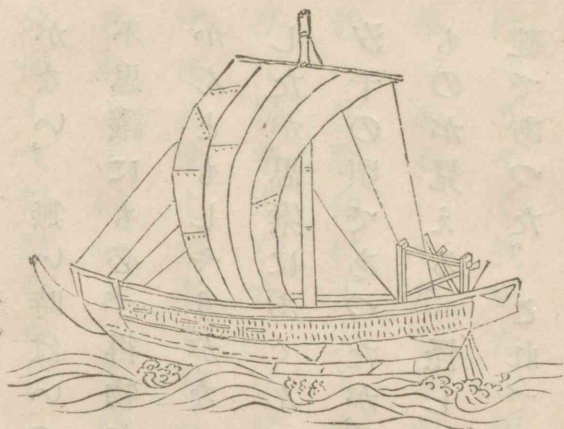
十年このかた待てども、便船のたづきが無い。あてにならぬ事をあてにして此の島に朽果てるよりは、いつそ吾等の手に成るかぎりの大船を造つて本國へ歸る工夫をしてはどうかと一人がいふと、叶はぬまでもと皆々熱心に賛成した。それから木寄せに取りかゝつて、四方の浦々から

寄木をかつぎよせた。僅かの小さき鋸でこれを挽割るのは容易なことではない。久しい間非常な勞力を費して、板はやうやく挽いたが困つたのはふいごや鍛冶道具の無い事である。しかし是がなければ、もはや何事も出来ぬ。皆皆一生懸命に工夫した結果、遂に大鳥の羽を革の代りに用ひて鞆たづを造つた。次に平な石を金敷にし、斧をたがねにして、あらまし道具を整へることが出来た。

これよりはいよく、船の仕組である。得手により仕事を分擔して無駄骨を折らぬやうにせねばならぬ。まづ船大工には三之助を棟梁として若手を附け、食物掛には老人を使ふことにした。其の他の面々は八方に奔走して材料を

集めたが、一から十まで流れ寄つた品物を集めること故、容易に揃ひやうがない。釘があれば木がなし、木があれば釘がない。無い時はいつも神慮に任せて一心に祈願したが、不思議にも必ず得物がある。或時の如きは釘が盡きていかんともしやうがない。一同仕事を休み額を鳩めて相談したが、思案にあぐんで、御祈をした後に濱邊へ行くと、丁度汐干の頃であつたが、遙かの沖の石の間に、何やら妙な形のものが見える。怪しんで石を除けて掘り出して見ると古碇であつた。これで十分に釘を拵へて、しきりに工事を急いだ。かくて着手のそもくから三年目にやうやく八分通り出来上つた。

舟の形は凡そ出来上つたが、その上に必要な材料が数々ある。まづ板のはぎ目に詰めて水漏りを防ぐ巻わたもなければならぬ。是等の材料をも苦心してやう／＼に取集めて造り上げた。さて又船を海までおろす道筋の堀割は、出入三年、三百人手間を費して、殆ど舟と同時に出来上つた。かくて船の用意が全く整つたので、本國へ持歸る積荷を造り、死亡した仲間及び前に流れた人々の遺骨を箱詰にし、尙のち／＼この島に漂流す



漂流人の造つた船

る人の爲に衣食住の心得を書留めて、さていよいよ出帆の準備をした。神助によつて、出来まじき船もめでたく出来上つた。此の上、尙神々の冥助によつて、恙なく本國へ歸らねばならぬ。ついでは何時何の方角へ向つて進んでよいか、神々の御示しを請はうといふので一同は精進を積み、身を淨めて、御籤を引くと、方角は戌亥の方、日取は六月八日と現れた。待兼ねた其の日になつて、朝早く起きて見ると天道の恵にや、南の方から順風がそよ／＼と吹いてゐる。

寛政十三年三月

時、寛政十年六月八日の朝、無人島の漂流者は、順風に帆を

上げて島の北の港を出帆した。八總勢十四人、土州赤岡浦船頭長平三十六歳、肥前堤川寺江町船頭義三郎四十四歳、豆州須崎村久七五十三歳、江戸深川相川町清水屋吉藏三十五歳、雲州島根郡三保ヶ岡清藏三十五歳、南部八之戸三之助二十九歳、大阪木津川幸町松兵衛四十一歳、加州石川郡大信浦長右衛門三十五歳、能登國ふけら郡磯尾村市之丞四十四歳、越後新潟志崎町由藏二十五歳、薩州志布浦船頭永右衛門五十五歳、同國八五郎三十九歳、日向赤丸村甚右衛門五十八歳、同國重太郎五十二歳。その中此の島に十四年の月日を送つた者一人、十二年の者七人、八年の者六人、淋しながら住みてはさすがに別の惜しまるゝ島を後ろにして艀拍子勇ま

鳥島の北。八丈島を距る南三十海里にある。

名は賢。小説家。明治三十七年歿す。假名垣管文。明治二十五年歿す。家初年。六十五歳。

しく漕ぎ出した。一同の相顧る眼には嬉しさ、悲しさ、有難さの涙が溢れてゐる。

かくて九日には青ヶ島に着き、七月八日、公の船に送られて海路恙なく各夢にのみ見た故郷の人となつた。(趣味之傳説)

八 留守 齋藤 縁 入 雨

魯文翁が實歴譚の一に、或時地代の督促を二階に避けて、「留守と云へ」と手眞似にて妻に教ふれば、負はれし兒は何の氣もつかず、「お父さん、手など振らずに下りておいで。」

わが知合なる漢學者の、酒まゐりたりとて、聊かの事なれど

も酔うて、途に羽織落したるを、通りかゝれる車夫の拾ひ上げて、「貴方あなたの。」と差出せば、「いや俺わしでは無い、俺は自家うちからちやんと着て来た。」

上州は高崎の者とか、鍛冶屋の小僧の十三ばかりなるが、手も足も眞黒になりて追使はるゝを、何處が顔だ。」と人のからかひしに、小僧振返つて、「息の出る方が前だ。」

「お門を通りますので。」と人の音をひしに、「そんなら土手に茶店があります。」

五厘銅貨一つあてがへば、五厘菓子一つ買來るを例とする兒の、或日その無かりければ、壹錢を持たせ遣りしに、やがて歸りて、お釣といふを知らず、「今日はお菓子屋の叔母さん迄が、お錢をくれたよ。」

人様に對して、くれぐれも粗略無きやうと言葉遣の事を言聞かされて、奉公に出されし娘の、十七といへど、年弱なり、氣弱なり、誠に親の云ひし如く、ねんねえなりしも、奥様の御意には入りしが、旦那様のお出かけにオバと言ひさして、不圖呼捨にすまじき教訓に心づきしか、オバさんコート。

東京驛の出来な
かつた前の驛。

「貴殿倫敦は、ざつとどの方角か御存じか。」と、侮りたるらしき
若人が一言を、老人のはつたと怒りて、不肖ながら存じて居
ります。」と指したるは、新橋停車場。「何故か。」と聞けば、藩公歐
洲へ御立の節御見送り申し上げました。」(緑雨全集)

名は操。
詩人。

冬三の歌

三 木葉露の風

藪の築土をのぞいてみたら、

草は枯れく、石白く、

赤い野茨の實がのこる。

鳥の懸巢をのぞいてみたら、

懸巢こはれて芥がさがる。

芥さがつて雨がふる。

池の緋鯉をのぞいてみたら、

緋鯉見えぬにちよんぼりと、

蓮のあたまが浮いてゐた。

學校がへり下駄切つて、

肩の傘からかさくるくと、

冬三のつめたい雨がふる。(赤い鳥)

一〇 忘れ得ぬ人々

國木田獨步

名は哲夫。
文學者。
明治四十一年
歿す。年三十八。

山口縣

僕が十九の歳の春の半ば頃と記憶して居るが、少し體の具合が悪いので、暫時保養する氣で東京の學校を退いて國へ歸る、其の歸途のことであつた。大阪から例の瀬戸内海通ひの汽船に乗つて、春海波平かな内海を航するのであるが、殆ど一昔も前の事であるから、僕も其の當時の乗合の客がどんな人であつたやら、船長がどんな男であつたやら、茶菓を運ぶ船奴の顔がどんなであつたやら、そんなことは少しもおぼえて居ない。多分僕に茶を注いでくれた客もあつたらうし、甲板の上で種々と話しかけた人もあつたらうが、何も記憶に止まつて居ない。

たゞ其の時は健康が思はしくないから、餘り浮き／＼しないで物思ひに沈んで居たに違ひない。絶えず甲板の上に出て將來の夢を描いては、此の世に於ける人の身の上の事などを思ひつゞけてゐたことだけは記憶してゐる。勿論若いものゝ癖でそれも不思議はないが、其處で僕は春日の日の長閑かな光が油の様な海面に融け、殆ど漣も立たぬ中を船の船首が心地よい音をさせて、水を切つて進行するにつれて、霞たなびく島々を迎へては送り、右舷左舷の景色を眺めてゐた。菜の花と麥の青葉とで錦を敷いたやうな島島が、まるで霞の奥に浮いてゐるやうに見える。その内船が小さな島を右舷に見て、其の磯から十町とは離れない處

一〇 忘れ得ぬ人々

を通るので、僕は欄に凭り何心なく其の島を眺めてゐた。山の根方の彼處此處に脊の低い松が、小杜を作つてゐるばかりで、見たところ畑もなく家らしいものも見えない、寂として淋しい磯の退潮の痕が日に輝いて、小さな波が水際を弄んでゐるらしく、長い線が白刃のやうに光つては消えて居る。無人島でない事は其の山より高い空で雲雀が啼いてゐるのが微かに聞えるのでわかる。「田畑なる島と知りありあげ雲雀。」これは僕の老父の句であるが、山の彼方には人家があるに相違ないと僕は思つた。と見るうち退潮の痕の日に輝いてゐる處に一人の人がゐるのが目についた。慥かに男である、子供ではない。何か頻に拾つては籠か桶

かに入れてゐるらしい。一三歩あるいてはしやがみ、そして何か拾つてゐる。自分は此の淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此の人をじつと眺めてゐた。船が進むにつれて人影が黒い點のやうになつて了つた。そのうち磯も山も島全體が霞の彼方に消えて了つた。その後今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度此の島かげの顔も知らない此の人を憶ひ起したらう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

*愛媛縣松山市に
近い港。

其の次は四國の三津ヶ濱*に一泊して、汽船便を待つた時のことであつた。夏の初と記憶してゐるが、僕は朝はやく旅宿を出て、汽船の來るのは午後と聞いたので、此の港の濱や

町を散歩した。奥に松山を控へてゐるだけ此の港の繁昌は格別で、分けても朝は魚市が立つので、魚市場の近傍の雑沓は非常なものであつた。大空は名残なく晴れて朝日麗かに輝き、光る物には反射を興へ、色あるものには光を添へて、雑沓の光景を更に賑々しくしてゐた。叫ぶもの呼ぶもの、笑聲嬉々として此處に起れば、歡呼怒罵亂れて彼處に湧くといふ有様で、賣るもの買ふもの、老若男女何れも忙しさを面白さうに嬉しさうに、駆けたり追つたりしてゐる。露店が並んで立食の客を待つてゐる。賣つてゐる品は言はずもがなで、喰つてゐる人は大概船頭船方の類にきまつてゐる。鯛や比目魚や海鰻や章魚が其處らに投げだしてあ

る。腥い臭が人々の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を打つ。僕は全くの旅客で此の土地には縁もゆかりも無い身だから、知る顔も無ければ見覚えの禿頭もない。其處で何となく此等の光景が異様な感を起させて、世の様を一段鮮かに眺めるやうな心持がした。僕は殆ど自己を忘れて此の雑沓の中をぶらぶらと歩き、やゝ物靜かなる街の一端に出た。するとすぐ僕の耳に入つたのは琵琶の音であつた。其處の店先に一人の琵琶僧が立つてゐた。歳の頃四十を五つ六つも越えたらしく、幅の廣い四角な顔の、丈の低い肥えた漢子であつた。其の顔の色、其の眼の光は丁度悲しげな琵琶の音にふさはしく、あの咽ぶやうな絲の音につれて謠ふ

聲が沈んで濁つて淀んでゐた。巷の人は一人も此の僧を顧みない、家々の者は誰も此の琵琶に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く、浮世は忙はしい。しかし僕はじつと此の琵琶僧を眺めて、其の琵琶の音に耳を傾けた。此の道幅の狭い軒端の揃はない、而も忙しさうな巷の光景が、此の琵琶僧と此の琵琶の音とに調和しない様で、而も何處かに深い約束があるやうに感じられた。あの嗚咽する琵琶の音が、巷の軒から軒へと漂うて勇ましげな賣聲や、かしましい鐵砧の音と交つて、別に一道の清泉が濁波の間を潜つて流れるやうなのを聞いてゐると、嬉しさうな、浮きくした、面白さうな、忙しさうな顔つきをしてゐる

る巷の人々の心の底の絲が、自然の調をかなでてゐるやうに思はれた。「忘れえぬ人々」のもう一人は即ち此の琵琶僧である。(武藏野及渚)

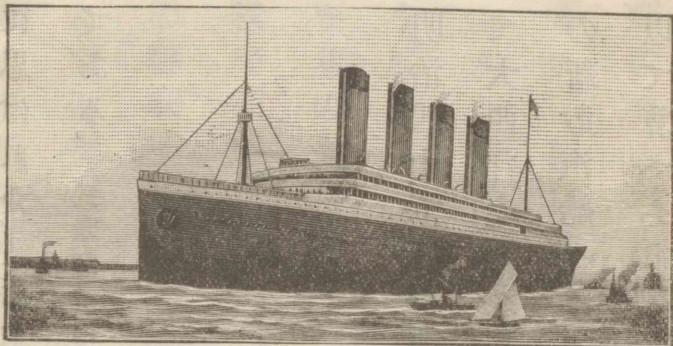
二 タイタニック號の沈没

和田垣謙三

明治四十五年四月十四日夜、魔の如き一大巨船が闇を衝いて大西洋を西へ駛つた。巨船は英國ホワイトスター會社の新造汽船タイタニック號で、その總噸數は四六、三二八を以て算へられ、船形の長大と、設備の完全とに於てレコードを破り、造船界の一新紀元を劃したものと噂があつた。

*經濟學者。文學者。大正八年歿す。

*北米合衆國の東
北ニューファウ
ンドランドの島
の東南角。



タイタニック号

そのレコード破の巨船が、英國から米國に向つて處女航海を試みるのである。新奇を好む人心と安全を要むる人心とが一つになつて、乗船を申込む者非常に多く、どの船室も一乗客を以て満たされ、乗客船員を合してその數無慮二千三百四十人の多數に上つた。大洋の怒濤もタイタニックの前には縮緬の皺程にしか見えない。船は二十節の速力を以て滑るが如く航海を續け、既に航海の半ば以上を航行して、ケーブルレース附

近に出た。米國は次第に近づいた。城に據るが如き安泰の思を以て乗客は更け行く夜の平和の夢に入つた。午後十一時四十分北極から流れて來た巨大な氷山――水面上の高さ百呎、水中に没してゐる部分はその十倍と測られた巨大な氷山が、俄然タイタニックに肉薄した。危機一髪、あはやと云ふ間も無く衝突して船は大損害を被つた。闇夜なり。洋上なり。乗客の夢は破れて、悲慘の絶叫と憂愁の感情と驚愕の念慮とが、タイタニックの内部に充滿した。船員は非常な努力を以て救助に従事したが、その全部を救ひ出すことが出來ず、十五日午前二時二十分に至つて、船は全く底ひも知れぬ海底に沈んで了つた。此の間實に二時四

十分間。その間に如何なる物語よりも悲壯悽慘なる悲劇が演出された。之を數字に見よ。乗客の救助された者は七百〇五人、その中女は四百人、男は三百五人であるが、三百五人中百八十九人はボートを漕いだ水夫であるから乗客は僅かに百十六人しか無い。婦人の四百に對して、男子の百十六人は凡そ四分の一である。而して此の救助人員を總乗員の中から差引いて、殘千六百三十五人は、皆一樣に大西洋の海底に葬られたのである。船客の中に四人の郵便事務員がゐた。船の運命が愈極つた際、彼等は自分達のことは少しも構はず、死が前後から脅してゐるにも拘らず、冷然として數多の郵便物の中から書

留郵便物の行囊二百を選び分け、後生大事にそれを守つてゐたが、いよゝゝ絶望と知れた時、船員に向つて、郵便物は大事にしてくれ。と言つてそれを引渡し、自分等は泰然自若として水底の藻屑となつて了つた。

船長はスミスと言つた。彼は最後まで船に踏止つて他の船員を奨勵し、臨機の處置を取ることに努力してゐたが、その際彼の屢繰返した言葉は、英國的なれ。といふ一語であつた。是は言ふまでもなく英國人の面目を失墜するやうなことをするな、男らしく振舞へと言ふ意味である。婦人は大抵救助されたが、その中多少死んだものもあつた。死んだのはボートに乗ることを拒んだものである。今そ

の一二の例を擧げて見よう。婦人船客の一人に五十路の坂を少し越えた婦人がゐた。良人と同船してゐたが、事急なるに臨み、良人は最後の握手を與へて、私は此處に踏止るが、お前は女の事だから一刻も早くボートに乗移つて身の安全を計つた方が可い。」と言つたが、夫人は頭を左右に振つて肯じない。船員も早く移乗せよと勧めたが、なか／＼肯じない。「今日の今まで何十年といふ間、苦樂を共にして來たのですもの、此の際私一人助つて、見す／＼貴方を見殺しにすることが出来るのですか。私は厭です、此處を逃げるのは厭です。死んでも構ひません、死ぬなら御一緒に。」と言つて良人の腕に縋り附いて動かなくつた。名は何と言

つたか忘れたが、それが猶太人であつたことだけはたしかに記憶してゐる。これらは烈婦的、貞婦的とでも言はうか、東洋流の勇ましい、義理の固いところがあつて、強く吾々の感情を動かす。又或婦人は、一頭の犬を連れてゐたが、ボートに乗移れと勧められた時「犬も一緒ですか。」と言ふと「それは出来ない。」といふ答であつた。此の婦人は非常な愛犬家で、犬と離れることが出来ないのので、犬が連れて行けないなら、私はボートへ乗りません。」と言つて、犬と共に沈み行くタイタニックに残つた。そして悲惨な死を遂げた。仁もこゝまでになると考へものです。

子供や婦人は勿論、乗れるだけの人は皆ボートに乗せて、さて後に残つた人々は船が沈没して、了ふまで甲板に集つて、樂隊をして音楽を奏せしめ、自分等は彼の神のみ許に近づかん、といふ讚美歌を合唱した。そして未來の幸福と光榮とをその胸中に描きつゝ、悲惨な生の最後の幕を鎖した。その當時予は巴里に在つたが、これがため此の歌は非常に有名になつて、處々で屢練返され、予も衆に和してこれを唱つたが、唱ふ毎に暗涙をとゞめかねた。叔、此の溺死した乗客の中には多くの知名の士があつた。數億圓の財産家として名を知られたるアストンもゐたが、その妻女と下婢とは、救はれたにも拘らず、彼は船に残つて衆と共に死んだ。

また平和論者として、雜誌記者として、その名を世界に馳せたステッドも船客の一人であつたが、此の人も同じく悲惨な死を遂げた。日本人も一人居たが、これは幸にも助つた。鐵道院の官吏だといふことである。そのほか尙多くの名あり財あり力ある男子が死んだが、婦人や子供は大方救助された。これ何故であるか。海上に於ては名も財も力も何等の價がなく、たゞ婦人と子供とが眞先なのである。然るに男子の中にも卑怯な奴がゐないではなかつた。或者の如きは、密かに婦人の乗つてゐるボートの中に飛込んで、いきなり婦人の著てゐるケットを引奪り船底につゝ伏して寒さと恐しさとに打顛へ、呼べど起せど身動きもしなか

つた。その癡救助船が來た時には、我一番先に乗移つて、巧に身を隠したといふことである。また或者は悪い機轉を利かして、女装してボートに乗込んだ。その當時の新聞記事によれば、二三の支那人が同船してゐたが、何れも巧にボートに入込み、密かに船底に身を匿してゐた。處が船ではそんなことゝも知らず、出来るだけ大勢の人数を乗せたので、豫期せざる一大椿事が起つた。といふのは翌日ボートを改めて見た時、その船底に電車に轢かれた蝦蟆の如く、彼等が押潰されて、ふにや／＼になつてゐるのを發見したことである。死んだものは仕方がないが、こんな事をして生きてゐる奴等に對しては、予は「それでも男か」と問うて遣り

たくなる。遭難者等が無事に上陸した後、ホワイトスター會社の副社長フランクリン氏は新聞記者の包圍攻撃に逢つた。氏はかくもあらんかと前以て之に答ふべき要點を手帳に書きつけて置いたから、直ちにそれを取り出して朗讀し始めた。まづ第一に「タイタニックは午前二時二十分に沈没せり」と聲高々と讀上げ、次いで第二の項を讀上げんものと視線を前方に向けると、今まで氏の周圍に密集して氏を二重三重に取捲いてゐた新聞記者は影も形も見えなくなつてゐた。これ彼等が互に先を争うて始めて聞き得たる一項を電話を以てその本社に通せんとした爲であつた。彼の地の新

聞記者の活動振の如何に機敏であり、如何に活潑であるかを窺ふことが出来る。

抑、斯くの如く多數の溺死者を生ずるに至つたのは種々の原因があるけれども、一はボートの數が不足であつた爲である。これ等に關する規定は千八百九十四年の制定であるが、それから千九百十二年迄は約十七年を経てゐる。而して其の制定當時と沈没當時とを比較すると、船の大きさが約四倍となつてゐる。それに拘らず一船に備ふべき法定ボート數は依然從前の通りで、少しも變更がなかつたのである。タイタニック沈没後にその規定は改正された。同船の沈没、多數乗客の死亡は全く一大悲慘事ではあつた

けれども、それが爲に造船その他種々の點に大なる刺戟を與へ、それが動機となつて改良が加へられた傾がある。例へば造船術に於ては、豫め甲板の一部を船體から分離する事の出来るやうに造り置き、いざといふ場合には、乗客をその分離し得べき甲板に避難させるのである。而して船體が沈没して了ふと、その甲板だけが上に浮んで、乗客は救助船の來るまで一時それで待つてゐるといふ風の構造が案出された。これはまだ考案だけで、其の後何處で實行されたと言ふことも聞かぬが、聽ては實現される日もあるだらう。兎も角こんな工合に種々の方面に於て種々新工夫の運らされたのは事實である。同船の不幸はさる事ながら、

一般人類の進歩の側から觀れば實に尊い犠牲であつたのである。(西遊メケツチに據る)

(一) 名は源一郎。新開記者。劇作家。明治三十九年歿す。

二 春日局

福地櫻痴

(二) 春日局。此の時三十三歳。
(三) 春日局の長男。後の稻葉丹後守正勝。此の時十五歳。
(四) 春日局の第三子正利。此の時八歳。
(五) 稻葉佐渡守正成。此の時四十一歳。
(六) 春日局の第二子正定。此の時十歳。

お福の方は千熊内記と共に夫の歸を出迎へ、福御機嫌よく御歸り遊ばしました。稻葉佐渡守いま戻りました。福さぞ御草臥で御座りませう。七之丞も疲れやつたらうのう。稻里數に積らば餘程の道なれど、好きの業とてさのみ草臥も致さぬ。と縁へ腰打掛けて草鞋を脱ぎ座敷に上れば、七之丞も獲物を縁に卸し草鞋を脱ぎて上る。お福の方は鐵砲を床

*勝重。此の時七十歳。

の間の際に直し。千熊は獲物を七之丞より請取つて、千今日は御獲物が澤山で御目出たう存じます。稻此の頃に無い大獵で七之丞の小腕には持ちきれぬ程であつた。七母さま此の様にたんと取れました。と獲物を分けて見すれば、福これは大層な御獵で御座りました。嘸重いことであつたらう。七誠に重う御座りました。福御獲ものは勝手へ持つて行き、奥で休息おしやれ。と云ふに千熊は獲物を持ち、七之丞内記も打連れて奥へ往きぬ。稻葉はお福の方に向ひ、稻今歸りしは板倉伊賀守で御座つたな。福左様に御座り

後の家光將軍。

當時靜岡に在る
徳川家康。

ます。稻定めて昨日申し入れたる一條で参つたであらうが、御身は何と返答おしやつたか。福昨夜申し上げたる通り、推量に違はず召抱へんとある其の先は徳川殿、而もかしづき参らする其の方は、當將軍家の御嫡男、竹千代君と承り、當座の御請は致しましたが、兎も角も關東へ下り大御所の上意を伺ひ、所存の程を申し上げたる其の上にて、思召に適はゞ御守役の御請けは改めて御前に於て致しませうと、伊賀守へ答へ置きまして御座ります。稻う、能くぞ答へられた。大御所の御目鏡に預り、若君の御守役と相成るは大慶至極。然らば御身は愈、徳川殿へ奉公の決心致されたるな。福夫に離れ子に別れ、三十路に餘る身を以て宮仕致す

三子。
千熊丞
内記

齋藤内藏助利

のは好ましからぬ事ながら、心を定めて御請致し、は、三代の天下を知し召す若君を守り立てまするは、家の譽、身の面目、又二つには和子たちが出世にも成らうかと存じますれば、東の路は遠くとも、此の身は江戸へ赴いて御奉公相勤め、流石は稻葉佐渡が妻、内藏助が娘ぞと譽められたう御座ります。稻お、天晴の決心よな。昨夜御奉公の一條を承つた其の時に勤めたくは思ひしが、今浪人の身となつて、賤の住居に暮せども、誰に心も置きもせず思ふ儘なる境界の心安さに引きかへて、苦勞に苦勞を重ねべき宮仕をば致せと夫の口から云ひ兼ねて、御身が心任せとは申し、に、いみじうも決心ありしは流石々々、御身が爲にも子供等が爲にも

小早川秀秋。
 豊臣秀吉。
 美濃國不破郡に
 ある。今須村の
 東に關原大松尾
 の南にあたる。
 關原の役、小早
 川秀秋此の山に
 よりて、形勢を
 觀て、遂に德川
 方の盟に背き西
 軍に應じた。

此の上もなき身の仕合、佐渡も共々祝着いたす。福仰せに
 従ひ心を定め御請は致しましたれど、思召もいかゞと存じ
 ましたに只今の御詞承つて安心いたして御座ります。稻
 誠に以て祝着いたす。世界廣しと申せども、大御所ほどの
 明君は恐らく二人とおはすまじ。其の御目鏡に掛るとは
 冥加至極のことなるぞ。斯程の明君ましますに如何なれ
 ば此の佐渡は弓箭の果報拙くて、斯る身とまでなつたるぞ。
 今更いふも詮なけれども、主と頼みし金吾中納言の殿には
 な、關が原の一戦に情なや不甲斐なや、さしもに深き太閤の
 御舊恩を打忘れ松尾山の裏切に武士の愧づべき御振舞。
 尤も、我には其の際迄大事を洩し給はねば夢さら夫と知ら

豊臣家。

ざりしが、主従の悲しさには、あれ見よ、あの佐渡も裏切武士
 よ。と世の人に後ろ指さゝるゝ事の口惜しく、小早川家を退
 去して本國美濃に引籠り、程なく此處に閑居して憂き年月
 を送るこの身。福御尤なる御述懐、頼みし主の心ゆゑ、さし
 もに智勇勝れたる御身にておはしなから、世にあぢきなく
 おはします御心の中お痛はしう存じます。稻最早再び世
 の中に出まじものと決心し、斯く閑居してあるからは、大阪
 方から招かうとも、諸大名より申さうとも、望にあらねば従
 はず、たゞ埋木の此の儘に朽果てんとは初より我が覺悟の
 事ながら、あたら三人の子供まで俱に日蔭の身となして、青
 き雲をばよそに見て、白き伏屋に世を忍び、生長ある身を徒

に送らする事の不便さよ。然るに今日時來り御身が此の度は宮仕、憂きもつらさも子供等が出世の爲と思はれて只一心に精勤あれ。子供は某預つて文武の修行致さすべし、さりながら、大御所より御沙汰無き其の内は子供等が事めつたに御願ひ申さるな。」福段々の御教訓有難う存じます。唯今も伊賀守が千熊を關東へ同道致し竹千代君の御小姓に差出すやうにと深切の心附けでは御座りましたが、先私一人下向なし其の上の事に仕りませうと申し置きました。」稻「それは能くこそ申された。夫でこそ佐渡が妻返すも子供等は上意次第に致されい。彼等が立身するもせぬも皆御身の勤め振に由る事。して出立は何時おしやる。」

福「御暇の上は後とも申さず今より直ちに支度いたして京へ上り、伊賀守方へ參る積りで御座ります。」稻「さりとは餘り火急な出立、併し決心の上は空しく月日を送るも無益、早出立いたされて宜からう。」福「左様なれば旅の用意を。」稻「奥へ參つて致されい。」福「御免なされて下さりませ。」稻「とお福の方は奥へ入る。稻葉は此方に向ひて、」
と叫べば。伴作、新左衛門、空兵衛の三人、奥にて、
三人「はあ……」
と應へて出で來り、手を支へて、
伴「御用で御座りますか。」稻「其方ども、承つたであらうが、

奥方には將軍家の召により俄に江戸表へ出立あれば、門出を祝ふ用意いたせ。」李委細承知仕ります。」稻和子たちにも着服改めて是へ出るやうに申聞けい。」李畏まつて御座ります。」新して、奥様の御供は誰に仰せ附けられますか。」稻其の儀は奥方に伺へ。申付けたること疾くいたせ。」
三人はつ。」

と答へて打揃ひ奥に入る。後に稻葉は首を傾け、稻實に大御所は凡人ならず、竹千代君の御守役、譜代恩顧の諸大名數多ある其の中にはすぐれし女性もあるべきに、たつて我が妻を召抱へらるゝとは、はてどうして彼が器量をば御存じなされて御座るやら。」

と不審して居たりけり。稻實は此の時千熊七之丞内記の三人は紋付の衣服、木綿袴、一刀の形にて奥より出で來り、末座に坐り、手を支へて、千唯今奥にて母上より承りましたが、七俄に江戸へ御出立と申すこと、内御名殘惜しう御座ります。」稻嚙本意なく思はうが、往くゝは其の方たち三人が身の出世にも相成ること、共々悦べ。」三人はつ。」
と本意無げなり。稻葉は自ら立ちて肩衣袴を着し、床の間より短刀を取出し暫く見て之を差す。三人の老黨は折敷の上に熨斗を載せ、益徳利など持出して中央に並ぶ奥よりお福の方は手織紬に定紋を染出したる衣物を裙

高に端折り出で來りて、一同座定まつて、
稻奥が門出を祝ひ申してわざと式ばかりの盃いたさう。
福有難う存じます。」「奎一同恐悦申し上げます。」「福皆も悦んでくりやれ。」

と稻葉は老黨が差出したる熨斗を受取つて自らお福の方の前に据ゑ、更に折敷の上なる盃を取上げ老黨の酌に立て飲み、再び折敷に載せてお福の方に差す。お福の方は盃を押戴き一盞受けて一口のみ、
福今日の門出に水盃とは。」「
と不審すれば、稻葉は打點頭きて、
稻これぞ稻葉家出陣の吉例。御自分には此の度忝くも大

*他に弟國千代君がある。

御所の御目鏡に預り、竹千代君の御守役と相成る事、家の譽、身の面目、此の上は竹千代君三代の天下御相續と定まるまでは、御側を離れず附添ひて、萬事に心を附けねば成るまい。承れば、當將軍家の公達は竹千代君御一人にもおはさぬよし。公方高家には得てある例。奥表の人々が思ひくの方様に心を運び手を入れて、『御跡目には此の方をば。』いや彼方。』と争ふうち、事によつたら若君の御身の上に降り掛る御危難なしとは申されず。其の御危難の打寄る大波と見ば、打つて乗越へ、小波は開いて搔潜り、右に避け、左に退れ、退引ならざる其の時は一命捨て、若君の御安泰を謀るのが是ぞ即ち御守役。されば御身が若君にかしづき申す其

の中は、戰場にある心得で命を的に勤むべし。夫子に心引かされて卑怯未練の氣も出なば、大事の場合に不覺を取らん、依つて出陣の例により、水盃を參らするは佐渡守が儼事なるか。福重々の御教訓、肝にこたへて御座りませぬ。たとひ如何なる難儀に出遇ひませうとも其の場に臨み未練を出し、家名の汚になる様な不束は致しませぬ。御心安う思召せ。稻、それ聞いて安堵いたす。と差したる短刀を取上げて、
 稻此の一腰は稻葉家の重代、もと新田家の御品にて南朝の勇婦と聞れたる伊賀の局が守刀と云ひ傳へたり。寸は少し延びつれど、若君を守護なすに最究竟と存ずれば、今改め

後、伊賀守の
 女。嫁す。
 榊正儀

て驢に進じ申す。福は、あり難う頂戴いたします。

と押戴いて直ちに帯に差し、稻葉が顔をつくくくと見て、福わが夫。是が暫しの御別れで御座りますか。思ひ出せば此のふくは、幼き其の折に父にも母にも死に別れ、京に上つて三條の御家にたより人となり其の後美濃に呼び返され、ふとした縁でわが夫に添ひ申し、は十七年前で御座りました。明日からして我が夫の御身のまはりの御不自由、それさへあるに和子たちが起き伏しの世話、著物の事、嘸御面倒で御座りませう。稻、なに面倒な事あらう。子供の世話は佐渡が慥かに引受けた。案じ召さるな。福、有りがたう御座ります。尙くれぐれも願ひ置きまするは江戸表

へ着次第すぐ様便り差立てませうほどに、御安否の御消息
 必ず御送り下さりませ。よしや用が御座りませいで、御
 便は屢、御聞かせ成されて下さりませ。」稻委細承知致した
 文通にて互の無事を知らせ合はん。體こそ西東とは隔つ
 とも夫婦の心は素より一つ。」福御嬉しう御座ります。」
と盃を飲み干す。
稻その盃は千熊より順盃に家來たちへまはされい。」壬は
 つ畏つて御座ります。
と千熊より皆々順盃にまはす。
李御流れ頂戴仕ります。」
 と酒禮も濟みたれば、

*教訓書名。一卷。
 作者未詳。舊寺
 子屋教科書。父
 母孝朝夕。師君
 仕晝夜。交。友
 勿。事。己。兄。盡
 禮。敬。己。弟。致。愛
 願。

福「これ千熊七之丞内記三人とも爰へおぢや。先程も申し
 し如く、この母は遠い東の旅へ出立いたせば、おとなしう父
 上の仰せに従ひませうぞ。又文武の稽古に精いだしわる
 徒いたづらして怪我すなよ。假にも兄弟争はず。家來に無理を言
 ふまいぞや。追々寒うなる程に薄着して風ばし引くな。
 豫て教へし實語教に「父母には朝夕に孝にせよ、師君には晝
 夜とも仕へよ、友に交つて争ふことなかれ、己が兄には禮敬
 を盡し、己が弟には愛顧を致せ。」とある本文を必ず共に忘れ
 まいぞ。」壬母上の御教示三人ともに、「三人必ず守るで御
 座ります。」壬して母上には何時ごろ御歸り遊ばしますか。
 福「いつ歸るとも差極めて云ひ難けれど、其の中に品に依り

ては御身たちを呼迎へる様になるであらう。」内「申し母さま、私も一緒に、七御供いたしたう御座りますれば、御連れ成されて、」兩人「下さりませ。」

と兩方より取りすがれば、お福の方は不便とは思へども、故と顔の色を正して、

福「ても聞分けの悪いこと。今この母は江戸へ行けど、後には父上が御座るのに、母と一緒に行きたいとは父上を御見捨て申す所存かや。夫では父上に不孝ぢやぞ。」内「いゝえ、何とおつしやつても母様と一緒に行きたい。」七「父上も御一緒に江戸へ御出で。」兩人「下さりませ。」福「また頑是ないこと申すか。」

と涙を隠して兩人がすがるを振拂へば、

内「それでも行きたう御座りますもの。」七「お連れ成されて下さりませ。」

と内記七之丞が泣くを見て、稻葉も不便とは思ひながら、稻「扱も、」兩人とも未練の振舞控へ居らぬか。母上が江戸へ下向あるも其方達がため、暫しの間爰に残り父の傍にておとなしう留守する事が出来ぬのか。夫でも其方達は武士の子か。」

と態ときつと兩人を睨めば、兩人は涙を拭ひ、

内「武士の子で御座るから、七立派に御留守を致します。」
千「兩人とも斯様申しますればどうぞ御宥しを願ひます。」

七、どうぞ御免。三人下さりませ。」
と三人が手を突いて詫入れれば、お福の方は堰きくる涙を押へて、
福おゝよう云やつた、夫でこそ稲葉家の御子息。さうなうては成りますまい。」
奎お育ちがらがよいとは申せ感心に御聞分け遊ばしました。」
伴私共も御心中御察し申し上げまして、
新俱に袂を濕して御座ります。」
と三人の老黨も涙に暮れければ、稲葉は氣を勵まして、
稲目出たい門出に涙は吉不ぢや。」
三人はつ恐入つて御座ります。」

と此の時鐘の聲の聞ゆれば、

稲秋の日脚のたけやすく、最早夕暮近ければ、
稲長居いたさば、子供等がいよゝゝ名残を惜しむであらう。
早々出立いたされい。」
伴江戸の御供はたつて無用と仰せあれば、心ならずも思ひ止りましたが、責めて京まで御荷物を背負うて御送り申し上げたう御座ります。」
福そんなら伴作大儀ながら。」
伴畏つて御座ります。」
(道具まはる)
中門の内より伴作は風呂敷包を背負ひ小包を提げ、
奎兵衛新左衛門も出で来て控ふれば、門の内よりお福の方、
後より稲葉佐渡守並に千熊七之丞内記見送りに出る。
福左様ならば我が夫。」
稲奥方。」
と兩人顔を見合せて、

稻「無事に參られい。」福はつ。良人も御無事で、吳々願ふは
 子供の事。」と云ふに、千熊は泣伏す。お福の方は惣門の方へ往掛くれば、
 と鐘の聲に送られて、お福の方は惣門の方へ往掛くれば、
 七之丞内記が駈出さうとするを、稻葉は引戻して、
 稻「心残さず出立おしやれ。」
 と云ふに、千熊は泣伏す。お福の方は後へ心は残れども、
 氣を取直して別れを告げ、心細くも秋の日の暮れて京に
 ぞ行きにける。(幕) (春日局)

女子副讀本卷二終

日卅月一年二十正大
濟定檢省部文

行發日七廿月十年一十正大
刷印版再正訂日二十月一年二十正大
行發版再正訂日五十月一年二十正大



製不
複許

定價
 卷一、二 各金參拾壹錢
 卷三、四、五 各金參拾參錢

大正十四年度
 臨時定價
 卷一、二 各金五拾六錢
 卷三、四、五 各金五拾九錢

著	同	同	同	同	同	代	發	印
者	者	者	者	者	者	表	行	刷
者	兼	者	者	者	者	者	者	所
吉田彌平	小島政吉	篠田利英	岡田正美	東京市日本橋區本町三丁目十七番地	東京市日本橋區本町三丁目十七番地	原亮一	金港堂書籍株式會社	東京市日本橋區本町三丁目十七番地
				東京市日本橋區本町三丁目十七番地	東京市日本橋區本町三丁目十七番地	亮一	金港堂書籍株式會社	東京市日本橋區本町三丁目十七番地
				東京市日本橋區本町三丁目十七番地	東京市日本橋區本町三丁目十七番地	新	金港堂書籍株式會社	東京市日本橋區本町三丁目十七番地
				東京市日本橋區本町三丁目十七番地	東京市日本橋區本町三丁目十七番地	堂	金港堂書籍株式會社	東京市日本橋區本町三丁目十七番地

女子副讀本 全五册
 發賣所 東京市日本橋區本町三丁目十七番地 金港堂書籍株式會社
 賣捌所 各府縣特約販賣所

廣島縣立高女

二南元 黒田 秀

